

センタープロジェクト紹介

科学研究費基盤研究(B)

「現代アメリカ外交の『視座』形成をめぐる複合的研究」

代表研究者：西 崎 文 子

本研究プロジェクトは、現代アメリカの対外政策の「視座」が形成される過程で基盤となってきた政治的・歴史的要因を、総合的に把握することを目的とした共同研究である。アメリカ外交の「視座」が他地域との関係で、あるいは国内の政治社会の変容の中でいかに構築されたかを分析し、長期的視点に立ったアメリカ外交論を構築しながら、現代のアメリカ外交を理解することを目指してきた。

同時代史的な観点からアメリカ外交を考察することを目的とする本プロジェクトにとって、トランプ政権の誕生が衝撃的な意味を持ったことはこれまでも指摘した通りである。「アメリカ・ファースト」を掲げるトランプ大統領は、パリ協定やTPPからの離脱、「ナショナリズム」を強調する国連演説、あるいはNATO諸国との軋轢など、アメリカ外交の依って立つ基盤を揺るがすような言動を繰り返してきた。さらに、「国境の壁」建築の予算措置をめぐる連邦政府機関の長期閉鎖を引き起こし、国内の混乱を誘発しているのも異例の事態である。しかし、このような時こそ、より長期的な視点でアメリカの政治や外交の連続性や非連続性を問い、なぜ今日このような状況が生まれているのか、われわれが見逃してきたことは何だったのか、そしてどのような展望を描くことができるのかを考える必要があるのは繰り返すまでもない。

そのような問題意識から、2017年11月にはアメリカ太平洋地域研究センターとの共催で「アメリカは今——歴史から政治へ」と題されたシンポジウムを開催し、デイヴィッド・グリーンバーグ氏(ラトガーズ大学教授)による“An Intellectual History of Trumpism”、ナタリア・モリーナ氏(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)による“Understanding Race as a Relational Concept: What’s at Stake in Seeing Ourselves in Each Other’s Histories”、そしてマイケル・アダス氏(ラトガーズ大学名誉教授)による“Bad Wars, Failed Nation Building, and the Retreat from Globalism”との三報告がなされた。この報告は、本学の遠藤泰生教授、古城佳子教授、土屋和代准教授からのコメントとともに、『アメリカ太平洋研究』18号(2018年3月公刊)に発表されている。

最終年度にあたる2018年度は、各分担者による研究が進められ、アメリカ外交の軌跡が大きくぶれる中で、その「視座」がいかに形成されてきたかを探る試みが続けられた。また、2019年1月には、ジェイ・セクストン教授(ミズーリ大学、Kinder Endowed Chair in Constitutional Democracy)を招聘し、“From Triumph to Crisis: An American Tradition”とのテーマでセミナーを開催した。アメリカの歴史では「勝利」の後に「危機」が訪れるという法則性が見られること、またトランプ政権は、歴史的に見て逸脱というよりは、むしろアメリカ史に通底する特徴を備えているという問題提起は、アメリカ外交の視座がいかに形成されてきたかを考える上で、貴重なものであった。